



上智大学創立 100周年
 上智短期大学創立 40周年
 上智社会福祉専門学校 50周年



遙かなる胎動

No. 1

1. 上智大学の原点とフランシスコ・ザビエルの夢

日本史の授業で必ず覚える1549(イゴク広まるキリスト教)の年号。言うまでもなくフランシスコ・ザビエルが鹿児島に到着した年である。上智大学の原点は彼の到着した1549年にさかのぼる。彼はイグナチオ・デ・ロヨラとイエズス会(カトリック修道会)を設立し、東洋へのキリスト教の宣教の使命感からインド経由ではるかな東洋に向かう。現在なら数時間で到達するところをリスボン-インドでも10カ月もかかる危険な旅であった。

1547年、途中のマラッカで会ったアンジロウ達から日本人は、高い道徳心、旺盛な知識欲、誠実な生活態度を有する稀有な民族だと判断し、ぜひ日本に行くべきと結論を出す。この間の詳細は全てザビエルがローマへ頻りに送った手紙で明らかとなっている。

1549年8月15日はザビエルが日本に初めてその足跡を記した日である。異質な気候風土、食べ物、キリスト教の日本語への置き換えなど困難を極めたが、日本人に対する敬愛の念を「知りえた限りではこれ以上に優れた人々はいない」と手紙で報告している。



1549年11月5日付、ザビエルが鹿児島から送った手紙(イエズス会ローマ古文書館蔵)



イグナチオ・デ・ロヨラの肖像



フランシスコ・ザビエルの肖像(神戸市立博物館所蔵)

ところでザビエルの日本での目的は二つあった。「ミヤコ」に上り「国王」、つまり天皇または将軍に会い日本宣教の許可を得ることと自分がイグナチオと勉学にいそしんだパリ大学のような大学を「ミヤコ」に設立し、ヨーロッパと日本との思想、および文化の一大交流拠点にする計画である。彼はまず平戸、山口、大分などでの精力的な宣教で基礎固めをし、二つの目的の実現準備に1551年大分から船出する。この時に日本人の青年を二人ヨーロッパで学ばせるべく同行させた。「日本人は世界には唐(中国)と天竺(インド)しかないと考えているので彼らに世界を体験させたい」と手紙で伝えている。同じように日本について情報の乏しいヨーロッパ人にいかか日本人が優れているかを知らせようと、高僧二人も同行させる計画もあった。残念ながら青年達はゴアとコインブラで客死し、帰

国はかなわず、また高僧も見つからずこの構想は実りに至らなかったが、ザビエルの描く「双方向的な人物交流を基に日本とヨーロッパの文化・思想交流の明確な原型」がこの時すでに明示されていたのである。

2. 長い禁教令から解放され、明治末期にローマ教皇特使がやってきた



教皇ピオX世

ザビエルから 350 年を経て日露戦争のポーツマス条約直後の 1905 年 11 月、教皇ピオ十世はアメリカのメイン州ウイリアム・オコンネル司教を親善使節として明治天皇あてに親書を託し派遣した。これには日本におけるカトリック系の大学の創設という目的もあった。司教は東京市長、帝国大学総長、桂太郎首相と精力的に会談を重ね、フランスのみの影響下にある教育機関ではなく真に国際的な性格を持つ大学の設立という点で同意を得た。司教は日本国民がフランシスコ・ザビエルに深い敬愛の念を抱いていること、学校教育に伝統と経験のあるイエズス会への委託を桂首相に提言し承諾された。教皇の要請により、2 年後の 1908 年 10 月、イエズス会は約束通り一國に偏らない編成でドイツ人ヨゼフ・ダールマン、フランス人アンリーブシェー、イギリス人ジェームズ・ロックリフの三神父を日本に派遣した。更にヘルマン・ホフマン、土橋八千太神父が中心となり、財団法人上智学院を設立。1913 年 4 月、ザビエルが日本を去って 360 年、ついに彼の「夢と志」が「上智大学」の開学としてここに成就する。教授陣はヨーロッパ、中国、インド、アメリカ、日本の文化文明、叡智を集結した集団であり、まさに世界の思想学問が交錯する一大拠点としてのその後の上智を特色づける仕組みが確実に始動したのである。



司教ウィリアム・ヘンリー・オコンネル



ヨゼフ・ダールマン SJ



アンリ・ブシェー SJ



ジェームズ・ロックリフ SJ

ザビエルの揺るぎない青写真、ピオ十世の決断、イエズス会の祈りと推進力に根差した「上智大学」は 2013 年の創立 100 周年に向けて更に進化を続ける。



第3代学長 土橋八千太 SJ



初代学長 ヘルマン・ホフマン SJ